



ヴェルサーチが衣装を手がけた異色のバレエ

フレディ・マーキュリーとジョルジュ・ドンへのオマージュ作品
「バレエ・フォー・ライフ」の公演が、6月に始まる。クイーンの音楽や
ヴェルサーチが手がけた衣装も魅力的な異色の傑作を、お見逃しなく。

評1 ダンサーの動きとともに 美しさが生まれ出る衣装

中野香織(服飾史家)

ジャンニ・ヴェルサーチといえば、豪奢で奔放で官能的な、一時を象徴するファッションを創造したデザイナーとして名高いが、オペラやバレエの衣装デザインという芸術的分野での貢献も大きい。82年にミラノのスカラ座から依頼された仕事を皮切りに、数々のオペラやバレエの衣装をデザインしつづけた。動きをドラマティックに見せる舞台衣装をつくるという経験が、翻って、動きとともに美しさが生まれ出るプレタポルテのレベルを芸術的な高みにまで引き上げることにもつながった。

評2 アンバランスの美を生む ベジャールの共犯者

佐藤友紀(ジャーナリスト)

横尾忠則が手がけた舞台装置、特に聖セバスチアンの殉教の絵を背景にさまざまな衣装がベジャールの深遠な創造宇宙で舞う——ジャンニ・ヴェルサーチのデザインによる衣装が最初に我々の目に飛び込んできたのは、ベジャールの生涯のモチーフとも言える両性具有性を強く打ち出した神をテーマにした「ディオニス」だった。この作品で、古代ギリシャのデイトランポスの男たちの群舞と、作曲家ワーグナー一家や哲学者マニーチェの洗練された踊りを衣装のあり様で強力にバックアップし

モーリス・ベジャールの創作バレエでも多くの印象的な衣装を創り出してきたが、なかでも特別な作品に見えるのが「バレエ・フォー・ライフ」である。初演は1997年1月のパリ。

このバレエでオマージュを捧げられるのが「若くして亡くなったカリスマ」すなわち、ロックバンド「クイーン」のフレディ・マーキュリーと、ダンサーのジョルジュ・ドン。ともにエイズにより45歳で亡くなった。ヴェルサーチもまた、初演の年の8月に51歳の若さで売春夫の凶弾に倒れた比類なきデザイナーであったことを思いあわせると、「死」に縁取られた強烈な「生」を炸裂させるバレエが、

ひととき深い意味をたたえるように見えてくるのである。

「ボヘミアン・ラプソディ」が流れるなか、古代文字風の柄を描いた布を巻いて踊るダンサーたちの前で、ヴェルサーチの象徴でもあるグレルカ模様入りの靴をはいたダンサーが、祈りを捧げるかのように踊る。自由で斬新な情熱のほとばしりと神話的厳肅さが華麗に両立する、魂が震える一場面。そういえば、フレディもドンもヴェルサーチも、神が授けてくれたおのれの道を究めた先に、最高の自由を勝ち取ったかに見える男だった。「死ぬまで踊り(Ballet for life)」続けねばならぬ人間の歓喜とはかなさが胸に残るバレエである。

たヴェルサーチは、より彼自身の感性に近いと思われる「バレエ・フォー・ライフ」のデザインで、舞台パフォーマンズの衣装の頂点を極めた。つまり、クイーンのフレディ・マーキュリーと、ベジャール芸術の具現者ジョルジュ・ドンの魂を、衣装で表現したのである。フレディの役を踊るのは、初演時からジュリアン・ファープル。彼の豊かな金髪は、むしろ髪振り乱して踊っている姿が「ライオン」のたてがみのようだ」と評されたジョルジュ・ドン似。ただし踊りはバレエの基礎がしっかりした正統的なもので、クイーンの音楽と共に使用されるモーツァルトのメロディのせいもあって、現代と2

00年前が自由に交差するのが印象的だ。ヴェルサーチがファープルに与えた衣装は、白や赤といったインパクトの強いレオタード。が、そこにかつてベジャールが「カスターディーバ」で用いたようなポツクリ型の厚底の靴を合わせることで、奇妙なアンバランスの美が生まれる。たとえばミュージカル「ウィル・ロック・ユー」でも使うのをためらわれていたクイーンの名曲中の名曲「シヨウ・マスト・ゴー・オン」にも、何の違和感もなく振付けてしまうベジャールの大胆な試みに、ヴェルサーチはとことん共犯者としてその持てる力を供出した。それが本作だ。